

第2章 | 計画の背景

1 中区の特徴

歴史と文化が息づく中区。都市機能が集まる横浜市の中心区です。外国人住民や一人暮らし高齢者、障害のある人など、様々な立場の人々が暮らしています。

① 人口・世帯



1世帯あたりの人数は
1.71人

18区で最も少人数

② 多文化共生



8.3人に1人が
外国人住民

18区で最多

③ こども



1年間に生まれる
こどもは約700人

18区で最も少人数

④ 高齢者



総世帯のうち
一人暮らし高齢者は
18.3%

18区で7位

⑤ 障害のある人



障害者手帳を持つ人は
約20人に1人

18区で4位

⑥ 働く人・学ぶ人



昼間の人口は
夜間の約1.7倍

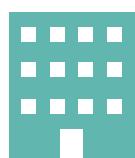
18区で2位

⑦ 健康



運動への意識は高い
18区でトップ

⑧ 生活・住まい



住まいはマンション・
アパートなどが7割超
18区で2位

⑨ 地域活動



自治会町内会加入率は
55.2%
18区で17位

2 第4期計画(令和3～7年度)の振り返り

第4期計画では、第3期から掲げてきた活動の2本の柱「えん結び」「元気いっぱい」を計画の中心に、『もっとみんなの中なかいいね！～相互理解を進めよう～』を5年後の目標として取り組みました。

中なかいいね！には、話し合いや事例共有の場が多くあります。第4期では、こうした場を積極的に活用し、取組を振り返りながら、次期計画についても話し合いました。

中なかいいね！推進会議

区計画を策定・推進するための会議です。委員は、13地区の代表者、関係機関・団体の代表者、学識経験者で構成されています。

会議では、地域や関係団体の活動状況を共有し、今後の区域での取組について検討しました。



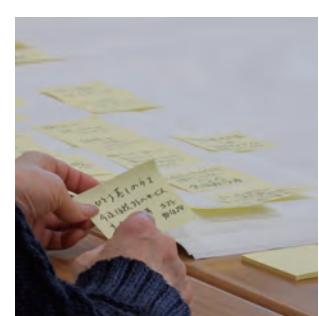
中なかいいね！発表会

区計画・地区別計画を推進するため、地域の特色ある活動の発表を行い、区民や関係者で共有しました。参加者にとって、自分の地域活動に生かせるヒントを見つける機会となりました。



中なかいいね！交流会

地域のボランティア団体、福祉サービス事業所、企業、支援者などが集まり、活動内容やコロナ禍での工夫などを共有しました。普段は関わりの少ない分野同士の交流も生まれ、中区全体での連携がさらに強化されました。



中なかいいネ！推進会議での主なご意見

コロナ禍を経験して、家に閉じこもりがちな一人暮らし高齢者の心身の健康状態がより気になるようになりました。今も地域で見守りを続けています。

第4期はコロナ禍で苦労も多かったのですが、屋外での活動を取り入れたり、食事会をお弁当に切り替えるなどの工夫で、継続・再開できた活動もたくさんありました。これらの工夫や成果を土台にすることで、今後さらに前進できるのではないかでしょうか。

食事会は食べることだけが目的ではないと思います。参加者にとってはその場に来ることが「元気づくり」につながっています。また、地域にとっては「見守り」につながっています。

地域活動そのものが、関わる人にとっても参加者にとっても地域にとっても、「元気いっぱい」につながっていると思います。

中なかいいネ！の「住み慣れた地域で安心して健やかに暮らし続ける」という大きな目標を実現するには、計画の枠組が地域の人にとって分かりやすいことが大事だと思います。
第4期計画の地域活動の「2本の柱」は第5期でも変えずに、地域に根気強く広めていきたいです。

地域の中で新しい担い手を見つけ、育てていくためにも、外国人や転入者などが地域とつながりやすい仕組みを考えていきたいです。

区役所・区社会福祉協議会・地域ケアプラザの振り返り

区役所・区社会福祉協議会・地域ケアプラザの事務局は、地域活動を支える人財・交流・情報の取組について一緒に振り返り、できたこと、もっと工夫ができるなどを整理しました。

- 関係者が活動の目的をしっかりと共有し意識して取り組むことで、事業の連携が広がり、担い手のやりがいにもつながるのではないか。目的に共感する「サポーター的な存在」を増やしていくとよい。
- 高齢者の見守りや健康づくりは進んできているが、こども・障害者・外国人などに向けた取組も広げていく必要がある。対象者が集まる場にこちらから出向くアプローチも大切。
- 「えん結び」への理解は進んできた一方で、「元気いっぱい」はやや弱い傾向がある。からだを動かすことだけでなく、「活動の場に参加すること」そのものが、こころの健康や社会とのつながりの面で、「元気いっぱい」を育む。そのことを、もっと地域に広めていく必要がある。
- 住民や事業者が日々の生活や地域活動の中で気づいた困りごとを地域の課題として受けとめ、支援者や関係機関につなぐ仕組みが必要である。支援する側と地域の皆さんと、困りごとについて一緒に考え、共有する場をつくることが大切。
- 区内のネットワークの強化や重層化を意識しながら、それぞれが取り組んでいくことが重要ではないか。



第4期計画期間中はコロナ禍により地域活動も大きな制約を受けましたが、活動に関わる多くの人々の思いや工夫によって、活動を続け、再開することができました。

日ごろの取組や活動の中で皆さんを感じていることには、地域のつながりづくりのヒントが多くあることが分かりました。活動を振り返り、他の活動を参考にしてみることで、新たな発見につなげていきましょう！

3 第5期計画の策定に向けたグループインタビュー

地域活動に関わる区民の皆さん、福祉・医療・教育など分野の異なる専門職・団体、事業所の皆さん約30人にご参加いただき、令和6年10月にグループインタビューを行いました。

コロナ禍を経て社会は大きく変化しました。その中で地域の人たちと関わってきた皆さんと、事例をもとに、身近な地域でどのような支援や関わり方ができるかを話し合いました。第5期計画の参考となる多くの意見を聞くことができ、さらに参加者同士の情報交換や学び合いの場にもなりました。

〈事例〉

- 不登校になりがちな小学3年男子とその家族
- 妻に先立たれ孤立しがちで、心身に不調のある80代男性と次男の世帯
- 外国人の母と中学3年男子、小学6年女子のひとり親家庭

参加者の皆さんのお意見



居場所づくり
ボランティア

中区には様々な人が住んでおり、多文化が共存しています。地域でのポジティブな対話や学びによって、暮らしづらさが解消されることも多いと思います。



地域食堂
ボランティア

外国人が主体になれる取組がまだ十分ではありません。外国人も支えられるだけの存在ではなく、自分らしく地域と交流できるようになることが大切だと思います。



介護事業所
ケアマネジャー

高齢者支援の現場では、高齢者本人だけでなく、同居家族が課題を抱えるケースも多いです。家族全体を支援する方法を学ぶことが必要だと感じています。



民生委員・
児童委員

中なかいいね！の推進に、こどもたちが参加する機会があるといいですね。こどもたちにも分かるように地区別計画を説明したいです。



民生委員・
児童委員

中区には、歴史や文化を背景に、地域活動を通じて仲間づくりがしやすい風土があると思います。そういう“いいところ”は継承しなくちゃ！



連合町内会長

こどもも障害者も、自分の言葉で思いを発信できるようにすることが大切です。そこから当事者同士や様々な関係者同士がお互いを知り、支援の輪を生み出すことができるはず！

自立訓練
事業所職員

障害のある人こそ、こどものときから好きなコト得意なコトで自分らしい暮らしができるよう、地域とつながっていくことが大事だと思います。

主任
児童委員

情報を得られる人とそうでない人との間に格差があると思います。支援者だけでなく、こども本人や保護者、地域の住民が一緒になって、地域を育していく姿勢が大切だと思います。

地区社会福祉
協議会役員

地区の事業は、中なかいいネ！の理念や目指す姿につながることが多いです。地域活動と計画へのコミット感を持つことで、みんなが元気になれるといいですね。



区役所職員

せっかく地域支援チーム^{*}があるので、その立場や役割をもっと生かして地域と関わっていきたいです。

防災・減災のためにも、地域のつながりづくりの大切さを日頃から働きかけていきたいです。

地区社会福祉
協議会役員

不登校のこどもを抱えて将来に不安を感じている保護者や、どうすればよいか分からず不安を抱えているこどもたちが増えています。まずは声を聞くこと！信頼関係づくりが大切です。

スクール
ソーシャル
ワーカー

こどもの頃から、身の回りでつながりや対話の場を持つことが大切です。自ら地域とつながる経験ができるよう、学びの場づくりを工夫していきたいです。

公立学校
教員

*区役所、区社会福祉協議会、地域ケアプラザの職員からなるチーム



グループインタビューを通じて、第4期計画の「えん結び」と「元気いっぱい」の考え方には、多くの人に親しまれ、共感を得ていることが分かりました。第5期でも基本的な枠組は継続しながら、工夫していきたいことも見えてきました。例えば、支える・支えられる関係ではなくお互いに支えあうことや、区民・専門職・民間企業など立場を越えた連携の強化、情報伝達の工夫などです。

地域における「多様なつながり」に加え、中区の特性を踏まえた「共生社会の実現」や「歴史・文化と地域への愛着」も、計画に欠かせない重要な視点であることを、みんなで共有しました。